

秋田県立博物館【菅江真澄資料センター】

真澄

MASUMI
No.42



真澄に学ぶ出張教室の様子 大館市立栗盛記念図書館にて（2024.10.20）

【左】松山氏による講座の様子【右】角崎の講座の様子

真澄が記録した「鹿角郡」

令和6年3月23日(土) ▶ 令和6年5月12日(日)

◆真澄が記録した鹿角紫根染

古くから鹿角の地では、ムラサキとアカネという植物の根を使って染める草木染めが行われ、それぞれ紫根染、茜染の名で技法が伝承されてきた。江戸時代には、盛岡藩の庇護のもと、すでに産業として発展し、鹿角郡の特産として全国にその名を知られていた。真澄も鹿角郡を旅する中で、二つの染物について関連する内容を記録しているが、特に紫根染の記述が多く見られる。

【花輪(鹿角市花輪)の里に出た。このあたりの業として、紫を染める営みがある。これを染めるのに必ず「にしこほり(ニシゴリ/サワフタギ)」という木の灰をいれるという。これが世に聞こえた「かづのむらさき」である】

《けふのせばのの》より

【毛馬内(鹿角市十和田毛馬内)や花輪の特産として、茜、紫の根染めの、色深く染めたものがあるという】

《錦木》より

【箒畑(鹿角市十和田大湯)に着く。この村はアオダモの木を灰を染物屋に売り、サワフタギの灰を紫屋に売るといふ】

《十曲湖》より

【福士川(鹿角市花輪)がある。山の麓の幸稻荷のお宮のあたりを流れているので、この宮の御手洗川であろう。この川水を

横丁、横町、袋町などへも引く。この里の紫の根染めや茜の根染めの色が特に良いのは、この川水に染めなすからだといふ】

《上津野の花》より

【毛馬内の特産に茜根染、紫根染があったて、それを生業にしている者らがいる。常に紫を搗くための臼があつて、その名をむらさき臼という】

《百日之図異文一》より



むらさき臼を搗く様子
《百日之図異文一》大館市立栗盛記念図書館蔵



紫根染小柄絞布地
栗山文一郎作・館蔵

◆十和田湖と周辺の滝

文化四年八月、秋。真澄は同行の人々とともに十和田湖(小坂町)を目指して歩みを進める。山中をかき分けて進む真澄の眼前に、いよいよ待望の光景が広がった。

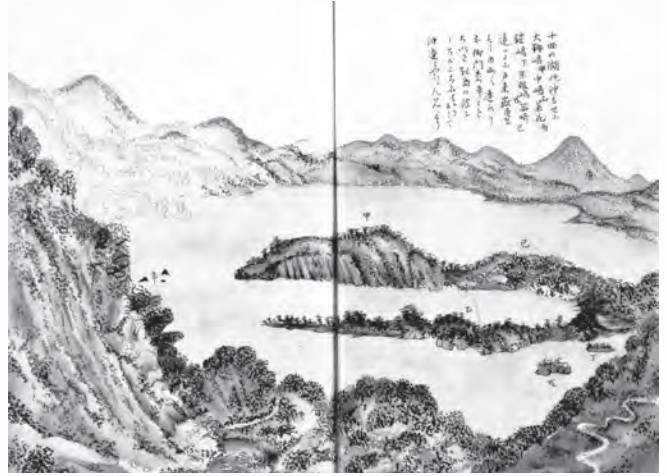
【徳兵衛平を過ぎて、木々が生い茂ったところをかき分けて進み、級の木(マダノキ)長峰に至れば、十和田の湖がたいへん良く見えた。湖の水面には、大鞍島(御倉半島・青森県)があり、形はしばらくに似て、たいそう大きく、クジラが潮を噴き出しているかのようであつた。それに連なつて茜が岬がある。赤土の「赤い」ということを忌む決まりから「まはに」という。大鞍島の前にあるのは中嶋(中山半島・青森県)である。鑑島と恵比寿大黒島、二つの島が鴛鴦が浮かぶように並んでいる。すべて島々には五葉の松や、モミ、イタヤカエデ、桜などが生えている。すでに梢は紅葉し始めていて、その美しさは言葉にできないほどである。

奥の海(東湖・青森県)、中の海(中湖・青森県)、鹿角海(西湖・小坂町)といつて、同じ湖のうちではあるが、地形の入り曲がっているところに隔てられて、そのように三つの名をもつ。今いる場所を鹿角海といつて、本物の海を見ているのと同様、海原が広がる】

《十曲湖》より

次頁上段右・大鞍島(奥)と中嶋(手前)
次頁上段左・十和田湖に浮かぶ小島

《十曲湖》館蔵写本

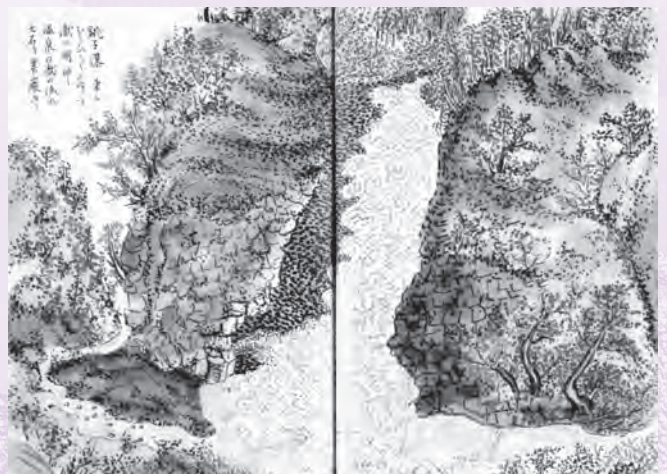
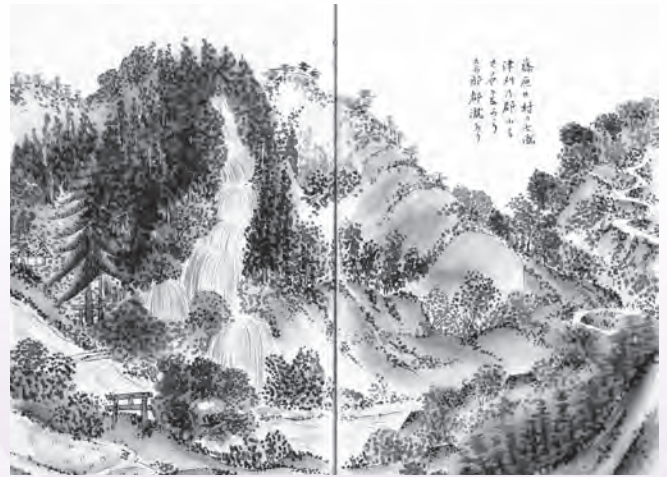


実際の十和田湖の眺め
平成三十一年撮影

美しい秋の十和田湖の眺めを堪能した真澄は、周辺の滝も目にしていく。十和田湖へ向かう途中では「七滝」（小坂町上向藤原）を、また戻ってきてからは「銚子の滝」（鹿角市十和田大湯）を見に行き、図絵に描いている。余談であるが、真澄は滝マニアと言っているほど滝を好み、旅の道中、機会があれば必ずといっていいほど滝を訪れている。

下段上側・「七滝」の図絵と実際の滝
下段下側・「銚子の滝」の図絵と実際の滝

《十曲湖》館蔵写本
「七滝」・「銚子の滝」平成三十一年撮影



月の出羽路 仙北郡を読む



真澄は晩年、秋田藩六郡の地誌編纂に取り組みました。この地誌編纂は藩命を帯びたもので、真澄にとっても一大事業でした。本展で取り上げた地誌《月の出羽路仙北郡》は、現在の大仙市・美郷町のほぼ全域と、仙北市、横手市の一部の地域について、真澄が文政九年から十二年（一八二六～一八二九）にかけて巡村調査し、まとめたものです。

本展ではこれらの地域を、かつて十三あった旧市町村ごとに内容を整理し、第一期（令和六年七月二十七日～九月二十三日）、第二期（令和六年十一月三十日～令和七年一月二十六日）の二回に分けて紹介しました。

第一期では旧西仙北町・旧協和町・旧南外村・旧仙北町・旧神岡町・旧大曲市・旧太田町の七つの旧市町村を取り上げました。

第二期では旧横手市・旧仙南村・旧六郷町・旧千畑町・旧中仙町・旧角館町の六つの旧市町村を取り上げました。

第一期

◎旧西仙北町

「村を守る人形神」・第三巻より

県内ではカシマサマやシウキサマなどと呼ばれる人形神を描いた図絵。半道寺村（現大仙市土川半道寺）の入口に立ち、村に病氣や悪霊が入るのを防ぐという。左右に張られた注連縄から、神として祀られていたことがわかる。髪の毛は杉の葉で作り、目鼻を板に描き、胸には午頭天王と書いた板を付けた。春と秋の二回作られたとする。

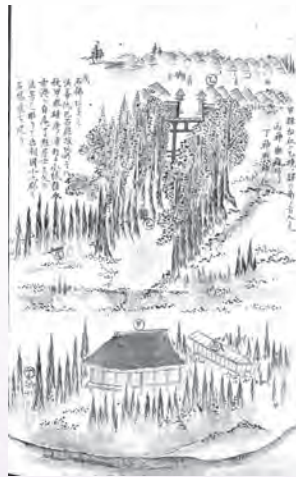


《仙北郡三巻》館蔵写本

◎旧協和町

「唐松神社」・第一巻より

唐松神社（現大仙市協和境）と参道の杉並木を描く。図絵上部に見える往来が「乙」羽州街道。街道に面して朱塗りの鳥居があり、そこから神殿までは杉並木が続く。杉並木は現在、巨樹八十本が約百六十メートルに亘って並び、県指定天然記念物にもなっているが、当時からすでに抜きん出た大きさがわかったことがわかる。図絵下部、石段を下りた先に「甲」御神殿や「丙」神楽殿がある。



《仙北郡三巻》館蔵写本

「玉明神社とご神体」・第一巻より

現大仙市協和荒川面日周辺、荒川鉾山のほど近くに、かつて玉明神社があった。真澄は玉明神社のご神体を図絵に描いた。一番大きな水晶の集合体が「甲」ご神体である。また図絵手前、紅白の玉のような形をした二つが「丙」「日照玉」である。中には水晶が詰められ、「日乞」に

使うという。そして小さな水晶の塊二つが「雨乞」に用いたとされる、「乙」「雨零玉」である。いずれも荒川鉾山産の水晶であったと考えられる。



《仙北郡一巻》館蔵写本



「水晶実物（荒川鉾山産）」個人蔵

◎旧南外村

「岩倉温泉」・第四巻より

岩倉温泉（現大仙市南外）の様子を描いた図絵。湯屋は中央の板葺き屋根の建物で、湯桁が三つに分かれている。十人ぐらいがお湯に浸かっている。「この温泉は傷を癒やし、眼の病気や皮膚病の疥癬に効能がある」と、真澄は図絵説明文中に書いている。図絵右に「甲」薬師如来を祀る神社がある。この神社を温泉の守り神とするのは、薬師如来が医療を司るからであろう。



《仙北郡四巻》 館蔵写本

◎旧仙北町

「菅笠に残る爪痕」・第二十巻より

板見内（現大仙市板見内）に住む万太が、仲間二人と山菜採りに出かけた。「もう帰ろう」という声がしたので、万太が菅笠を被ると、いきなり摘まみ上げられ、気が付くと真昼岳（美郷町）の頂上近くにいた。菅笠には四つの爪痕が残っていた。山人か天狗の仕業であったのだろうかと言われている。真澄は化け物の爪痕を寸法まで測って図絵に描いている。

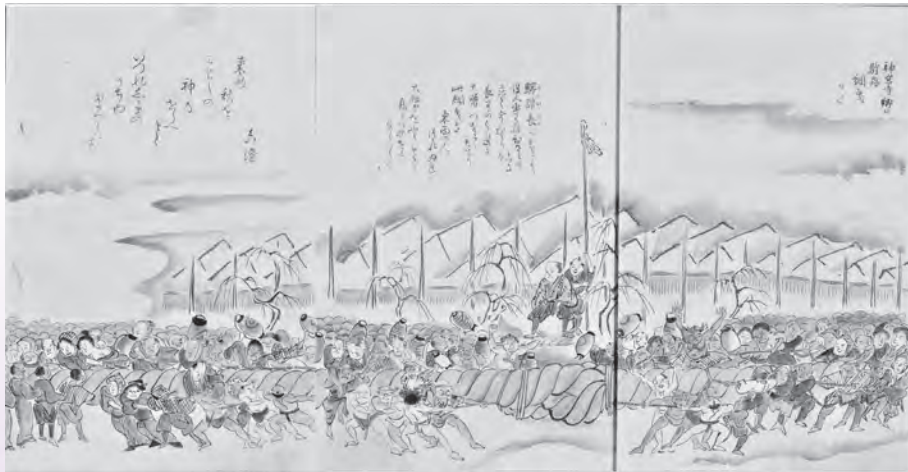


《仙北郡二十巻》 館蔵写本

◎旧神岡町

「大綱引き」・第五巻より

小正月、神宮寺（現大仙市神宮寺）では大綱引きを行った。図絵を見ると、大綱にたくさんさんの小綱を付け、互いに力を込めて引き合っている。勝負を見極める人物が綱の真ん中に立ち、その後ろの人物は御幣の付いた竿を立てている。勝ち負けで豊作かどうかが決まると真澄は記



《仙北郡五巻》 館蔵写本

すが、地誌中に引用される『六郡祭事記』には、勝ち負けで米価の高低が決まるとある。本図絵を描いたのは真澄ではなく、当地の画家・富樫恒秀である。

◎旧大曲市

「大曲の花火」・第九巻より

七月六日の夜、大勢の人々が橋の上に集まり、川面は提灯の灯りで色付いている。七夕行事の一つ、眠り流しの様子である。橋の真ん中、空中に薄赤く噴水のように見えるのは、大曲の花火の原型とされているものである。本文などに記載がないため、場所の特定はできないが、丸子橋（現大仙市大曲）と考えられている。本図絵を描いたのは真澄ではなく、他筆であろう。



《仙北郡九巻》 館蔵写本

◎旧太田町

「オシラサマ」・第二十一巻より

中里村（現大仙市太田町中里）の斎藤久兵衛家が白神社に祀っていたオシラカミ（オシラサマ）を真澄は図絵に描く。人・鶏・馬の頭などを雌雄二体彫り込む。地誌本文に「絹と綿で包み秘め隠す」とあるので、真澄が実際に見たのは頭を包んだ「包頭型」であつたと思われる。またオシラサマがもとは養蚕の神であることや、その作り方、祀り方などについても詳しく言及している。



《仙北郡二十一巻》館蔵写本

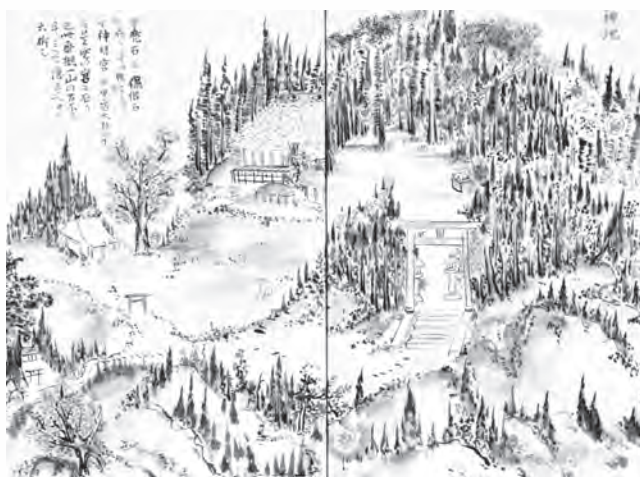
第二期

◎旧横手市

「金沢八幡神社」・第十七巻より

後三年合戦で清原家衡と叔父・武衡の本拠地となつたのが「金沢柵」であり、後の時代には「金沢城」が築かれること

になる。真澄が訪れた当時には、金沢城の二の丸跡に金沢八幡神社（現金沢八幡宮・横手市金沢）が鎮座していた。元々は後三年合戦後に源義家の命で、鎮護国家のため、源氏の氏神であり武家の守り神でもある八幡神を勧請したものとされる。真澄は山上にある境内の様子を図絵に描いている。



《仙北郡十七巻》館蔵写本

「王の鼻の面」・第十九巻より

金沢八幡神社の社家・三浦家の宝物であつた「王の鼻の面」を描く。面の縦横の長さのほか、鼻の長さ、眼の大きさに至るまで細かく記録している。真澄が素

材について「杉に見える」とあいまいな書き方をしたのは、表面に丹が塗られ、金色がちりばめられていたためであろう。また「王の鼻」について真澄は「伊勢神宮に祀られる「興玉神」つまり「猿田彦神」のことである」と、書物を引用して説明している。円仁作という。



《仙北郡二十一巻》館蔵写本

◎旧仙南村

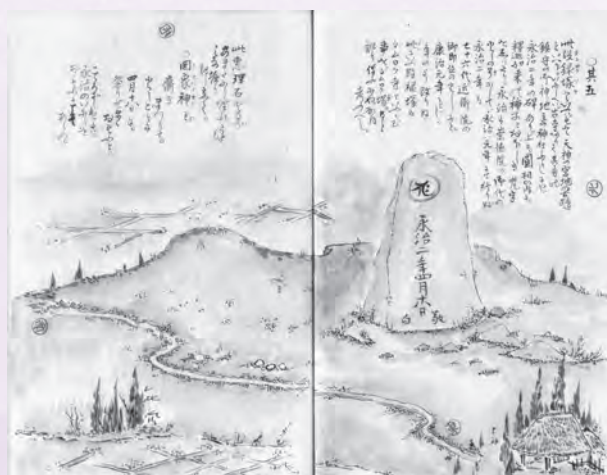
「[永治]二年の板碑」・第十四巻より

図絵右側に描かれている板碑が建っていたのは、現美郷町天神堂周辺。板碑は現存しているが、近くの菅原神社境内に遷されている。

真澄は紀年銘を「永治」としたが、実際は永治二年（一一四二）ではなく、板碑が盛んにつくられた南北朝期「永徳」二年（一三八二、北朝年号）と考えられている。板碑上部に刻まれた種字は、阿弥陀如来などを示す「キリーク」である。



板碑拓本（天神堂の永徳二年碑）
藤田守『古碑景十二』より



《仙北郡十四巻》館蔵写本

◎旧六郷町

「吉書天筆和合楽の幡」・第十六巻より

「正月十二、十三日になると男の童たちが、継ぎ足した色紙に「吉書天筆和合楽」と書き、それを高竿に付けて雪の上

に立てる。また木貝を吹き鳴らす」

真澄が記したこの内容は、現美郷町六郷で行われている「六郷のカマクラ」行事の一つ、「天筆」のことである。図絵には、「吉書天筆和合楽」の幡が寒風に翻っている様子が描かれている。元々は、どんと焼きの火中に書き初めを投じて、筆跡上達を願った吉書場に通じる行事で、実際の「六郷のカマクラ」でもこの幡は火にくべられる。



《仙北郡十六巻》 館蔵写本

「竹うち行事の原形」・第十六巻より

〔正月十五日になると、村人が門松や注連縄などの正月飾りを持って諏訪神社近くの広場に集まり、雪上にてそれらを火にくべる。そしてこの火を高竿を持って打ち合う〕

真澄は「六郷のカマクラ」行事の一つ、「竹うち」についても記録している。しかし真澄の記録からは、現在のように北軍、南軍に分かれて激しく竹を打ち合うといった荒々しさは感じられない。それは地誌中に描かれた図絵を見ても同様で、

元々は「吉書天筆和合楽」の幡が付けられた高竿を、あくまで「ご神火」にくべる過程で、「軽く打ち合う」程度のものであったのではないだろうか。

ただしこの図絵を描いたのは真澄ではない。筆遣いから画人・西宮四壁と考えられる。

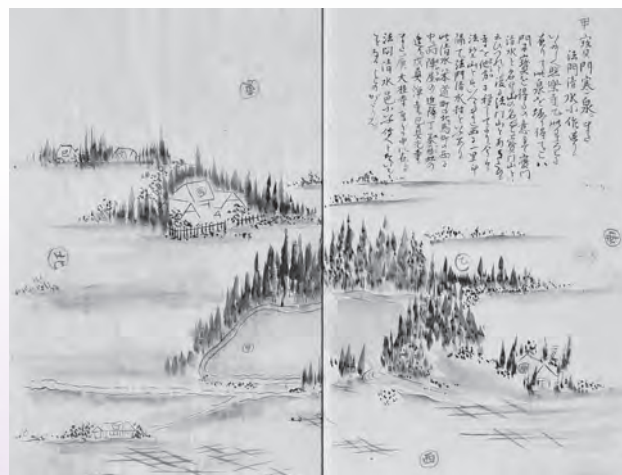


《仙北郡十六巻》 館蔵写本

「宝門清水と照楽寺跡」・第十一巻より

図絵中央に描かれている水を湛えた場所が「甲」宝門清水（現美郷町六郷）で、その傍らが「乙」照楽寺跡だという（現在は別の場所へ遷る）。元は兵火による焼失に備え、照楽寺の門前の土地を掘り、水を入れ、泉としたことが始まりとされ

る。「門の傍らに宝を得る」の意をもつて「宝門清水」と称したのがそのまま山号となり、後に「法門清水山」、さらに「法望清水山」に転じたという。



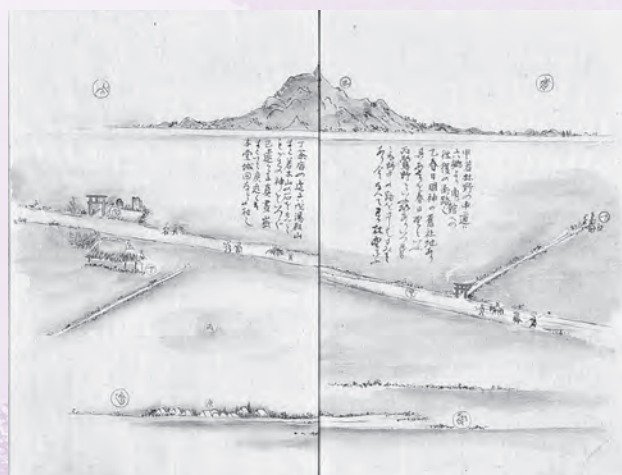
《仙北郡十一巻》 館蔵写本

◎旧千畑町

「真屋岳遠望」・第二十巻より

現美郷町本堂城回周辺から「己」真屋岳（美郷町浪花）が聳える東の方向を眺めた図絵。図絵中央、南北に続く道は、説明文中に「六郷より角館への往復の街路也」とあることから、現在の県道十一号、通称「角六線」であろう。多くの人が馬が行き交う様が描かれている。また周

辺に広がる野を総じて「若林野」と呼び、図絵下部に建ち並ぶ家々は「庚」本堂城回などの集落であるとする。



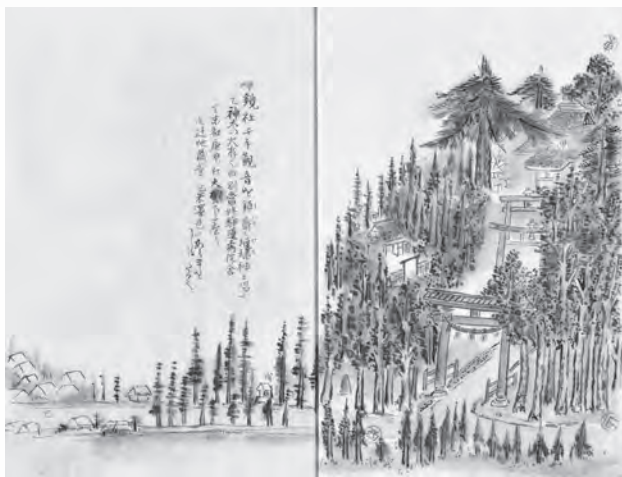
《仙北郡二十巻》 館蔵写本

◎旧中仙町

「水神社と国宝の鏡」・第二十二巻より

水神社（現大仙市豊川）を描いた図絵。真澄が訪れた当時は鏡社と呼ばれ、米沢新田村の総鎮守であった。ご神体が「線刻千手観音等鏡像」であったことに由来する呼び名である。「線刻千手観音等鏡像」は現在、秋田県唯一の国宝である。また鏡社のほかに堰神とも呼ばれたのは、延宝五年（一六七七）四月十三日、新田

を開発しているときに五尺あまりの深さの堰の底から、この鏡が出てきたためであらう。



《仙北郡二十二巻》館蔵写本

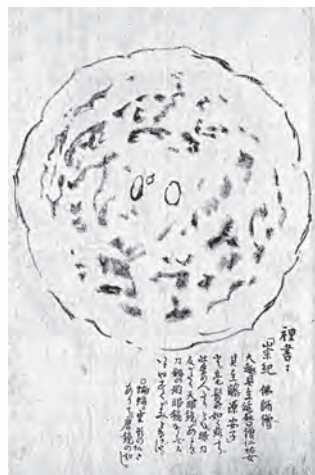
また真澄は「線刻千手観音等鏡像」の乾拓も採っている。ただ細い線（毛彫）で彫られていたため、うまく写し取ることができなかったようだ。鏡の裏面も同様にうまく写し取れず、「虫眼鏡などを使わなければ文字も読めない」とする。

◎旧角館町

◆《仙北郡二十五巻》について

《月の出羽路仙北郡》は、藩に献納された真澄自筆の清書本二十四巻までが現存している。第二十五巻については、真澄自筆の草稿本が、かつては存在していたことが分かっているが、現在は所在不明である。

ただその草稿本の「写し」がいくつか現存している。例えば明治四十一年に青柳理四郎によって本文のみが写された資料（青柳写本）や、昭和八年発行『秋田叢書第十巻』の編集のために、編集者の

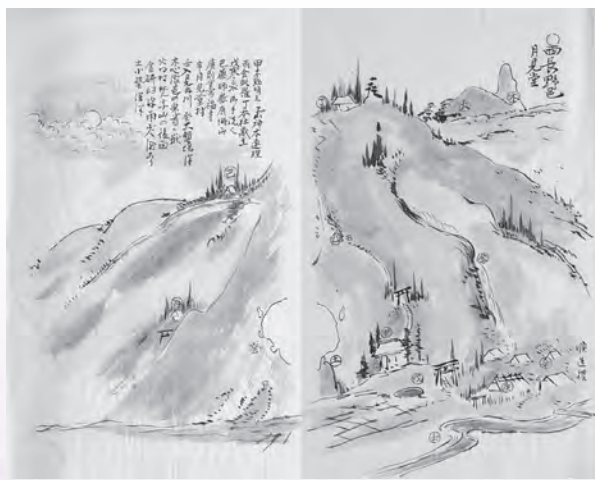


《仙北郡二十二巻》館蔵写本
右・鏡の表面
左・鏡の裏面

一人であった大山順造が、真澄自筆草稿本から図絵を模写した資料などである。それらの「写し」によって、第二十五巻に記された内容を知ることができる。

「月見堂村の様子」・第二十五巻より

現仙北市角館町西長野月見堂周辺を描いた図絵。図絵右下の集落が「辛」月見堂村。集落の中に「庚」常福寺があり、ほど近くの鳥居の奥には「甲」不動明王を祀るお堂があるとす。また集落を見下ろす山上には「丁」蔵王権現や「己」薬師如来を祀っていた。現在、当地には瀧脇神社が建っているが、村名を冠した「月見堂神社」の別称で呼ばれる。



《仙北郡二十五巻》大山順造模写
館蔵

編集後記（表紙写真の解説を兼ねて）

令和6年10月20日、大館市立栗盛記念図書館にて「真澄に学ぶ出張教室」を行いました。当センターでは例年「真澄に学ぶ教室・講演会」、「同・講演会」を開催していますが、センター開設初年度の平成8年（1996）を除き、会場はいつも博物館でした。「真澄の話を聞きたいけれど、秋田市まで行くのは遠い」という声を受け、博物館以外での教室開催を計画。真澄自筆資料「菅江真澄著作」を所蔵する大館市立栗盛記念図書館に、会場提供などご協力いただきました。当館の元職員である松山修氏を講師に迎え、はじめに当館学芸主事の角崎が「菅江真澄入門」と題した講座を、続いて松山氏が真澄が大館周辺を記録した日記《にえのしがらみ》についての講座を、それぞれ行いました。参加者は50名を超え、じっくり真澄の話を聞いていただくことができました。次年度以降も継続できればと思います。（角崎）

真澄
MASUMI
No.42

発行日
◎令和7年（2025）3月19日
編集・発行
◎秋田県立博物館菅江真澄資料センター
〒010-0124 秋田市金足嶋崎字後山52
Tel.018-873-4121（代）